様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８１００６

研究課題名（和文）コトン・マザー教育思想に関する研究

研究課題名（英文）Studies on Cotton Mather Educational Thought

研究代表者
佐藤　哲也（Sato, Tetsuya）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２７３８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：コトン・マザーの教育思想にアプローチするにあたり、彼が残した日記、説教、教理問答、宗教的パンフレットを収集した。また、ニューイングランドにおけるピューリタンの生活事実やメンタリティーをめぐる社会史研究の成果を渉猟し、マザーの子ども観や教育観を当時の社会的文脈に位置づけて相対化することを試みた。
彼が残した子ども向けの教理問答書である『ニューイングランドの子どもたちへの形見』や育児指南書『育児への配慮』には、原罪説を前提とした子どもの魂の救済が説かれるとともに、宗教教育を効果的に展開して子どもを回心へと導くための配慮として、子どもの恐怖心に巧妙に煽りながら内面統制していく志向性が如実に表れていた。

研究成果の概要（英文）：To approach Cotton Mather's educational thought, I get his diaries, some printed preachers, religious pamphlets. And to analyze his view of childhood and education from the social contexts of those period, I collect recent results of social history on the puritans experiences and mentalities in colonial New England.
A catechism for children, A Token for Children of New England(1700) and  a child rearing book,Cares about the Nurseries(1702) written by Cotton Mather, There were a lot of discourses on the necessities for rescuing child spirit and to lead the conversion experience because children of human nature are born with original sin. To put religious education and child rearing into effect, Mather tried to control child mind and break will to inspire fear of death and hell, and intrude into child' mind and govern internally.

研究分野：教育史

キーワード：コトン・マザー　ピューリタン　ニューイングランド　初期アメリカ　子育て　子ども観　教育思想　カテキズム

## １．研究開始当初の背景

アメリカ教育史研究は, Cremin に代表される古典的なアプローチ，それらを批判するリビジョニストによる再解釈，多文化主義的視点からの実証研究等，教育史像の再構築が進められてきた。特に植民地時代に関する研究は，ハーバードの経済史家 Bailyn の問題提起（*Education in the Forming of American Society*, 1960）を契機に，研究対象が多元化（入植地，デノミネーション，エスニシティ，ジェンダー等）することで，文化伝達としての教育の諸相が明らかにされてきた。なかでもピューリタニズムについては，1970 年代から 80 年代にかけての社会史研究の成果を反映して, 生活実践倫理,人間形成原理という視点から考察が深められてきた。

本邦においても，宇佐見寛や市村尚久の先駆的研究，植民地教育史をサーベイしてピューリタン研究の方向性を示唆した森田尚人の論文，またピューリタンの教育倫理に迫ろうとした村田邦子や安達寿孝の研究，アメリカ史研究者藤本茂生による子ども研究，佐藤哲也（本研究代表者）によるピューリタンの子育て思想や回心体験をめぐる宗教教育についての研究等々、一定の成果を挙げてきた。

また近年創設された「初期アメリカ学会」や「日本ピューリタニズム学会」等でもピューリタニズムをグローバリズムの視点から捉えなおす研究やピューイングランド第 1 世代のジョン・コットンやトマス・フッカーといった人物研究等、新たな進展を見せている。

しかしながら，ピューリタンの教育思想に関心を示す歴史研究者，アメリカ植民地時代を研究対象にする教育史研究者が極めて少ないことから，ニューイングランドにおけるピューリタンの教育思想研究は停滞したまま今日に至っている。こうした研究の空白を埋めるためにも，開拓生活が軌道に乗った一方で信仰の世代間継承の問題が顕在化したニューイングランド第 3 世代を取り上げて，アメリカにおけるピューリタニズムの土着化と変容について明らかにするとともに、アメリカの国民的精神性の根幹をなしているピューリタニズムについて理解を深めていく一助とする。

## ２．研究の目的

本研究は，ピューリタンの教育思想を明らかにするための試みとして，コトン・マザー（Mather, Cotton; 1663 年～1728 年）の教育言説を分析する。彼はニューイングランドの宗教・政治・文化が揺らいだ 17 世紀後半（信仰の世代間継承の問題，原住アメリカ人との抗争，ニューイングランド王領化，魔女裁判等），移住第 3 世代を代表する指導者であった。当時、世界最大規模の会衆派教会（Congregational church）であったボストン北教会（North Church）を牧会するとともに、ニューイングランドの政治や民衆生活にも大きな影響を及ぼした思想家でもあった。彼が残した教育言説から，危機の時代に先鋭化されたピューリタニズム（Puritanism）の生活倫理，子ども観，教育思想を読み取っていくことで、近代化の推進力とされたプロテスタンティズムが近代人の育成にいかなる光りと影を及ぼしたのか考察を進めた。

## ３．研究の方法

### （１）研究資料の収集

研究主題に迫るために，次の３つの分野に渡る研究資料収集を行った。①コトン・マザーが残した教育言説（テキスト・リソース），②コトン・マザーに関する先行研究（学術書，ジャーナル論文，博士論文等），③植民地時代ニューイングランドにおけるピューリタン・家族生活・親子関係・子ども・教育をめぐる研究資料。以上の観点から近年の研究成果を渉猟した。

### （２）コトン・マザーの教育思想の読解

先行研究を渉猟しつつ，マザー自身が残した１次資料を読解・考察していく。彼は生涯３人の妻を迎えていた（初婚・再婚の配偶者とは死別）。３番目の妻との間には子どもがなかったが，前妻・前々妻との間に 16 人の子ども（内息子は 10 名）を残している（14 名の子どもたちがマザーより先に夭折）。

父親としてのマザーの対応を次のような２つのシークェンスと５つのスコープの視点から考察を進めていく。シークェンス１：子育てに不安を覚え苦悩する時期（20 代～30 代），シークェンス２：家族愛に恵まれるとともに子育て経験を積むことで教育論が円熟していく時期（40 代），スコープ１：男児の教育，スコープ２：女児の教育, スコープ３：子どもの死をめぐる態度, スコープ４：宗教教育，スコープ５：父母の義務・役割。これらの「シークェンス」と「スコープ」をクロスさせながら，マザーの子ども観，教育意識の変化を彼のライフコースに従いながら検討するための資料を収集した。

### （３）コトン・マザーの教育思想の相対化

コットン・マザーの教育思想を明らかにするための手段として，17 世紀英米におけるピューリタンの教育言説にも着目した。英国に留まって地下運動を組織あるいは革命勢力なったピューリタン，ニューイングランドの荒野にエミグレして信仰共同体形成した第１世代と第２世代のピューリタン，それぞれの子ども観や教育意識とマザーのそれらを比較することで，ニューイングランドが社会・文化的多様性に向かう 17 世

紀後半，ピューリタニズムの教育思想はいかなる様相を呈していったのか明らかにするヒントを得た。

４．研究成果

本研究を進めていく中で，学会発表や研究論文執筆を通じて，研究成果を公開していく予定であった。しかしながら，研究初年度に職場環境が激変，講座運営と学生の就学・生活・就職指導を１人で引き受けざるを得ない状況に陥った。当初予定していた「エフォート」を著しく削らざるを得ない状況下，勤務状況好転を期待して資料収集を中心に研究を進めていった。３年を予定していた研究期間を１年延長して４年としたが，最終年，職場でさらなる予想外の事態に見舞われ，研究をまとめることができなかった。

その一方で，教育史学会，世界子ども学研究会，日本保育学会，日本乳幼児教育学会に参加して，研究情報収集や研究者との交流ができたことは，本研究を進める上で多くのヒントと得ることができた。また，世界子ども学研究会では，コトン・マザーによる教理問答書を分析した研究報告を行い，参加者から様々な意見や研究上の示唆を頂戴することができた。

本研究では次の３つの視点からの第１次資料，研究書，研究論文の収集を努めた。これらの資料の分析を行いながら，研究論文としてまとめ公表していく予定である。

（１）コトン・マザーの著書収集

マザーは，説教をはじめ，歴史，伝記，エッセー，寓話等々，約 400 にも及ぶ著作を残している。また彼の日記は植民地ニューリングランドでの出来事やそこに暮らす人々の日常を知る上で第一級の資料とされている。彼の著作は新規に装丁・再版されたものがある一方で，大半はマイクロ・フィルム化されている。近年，注文印刷のネット通販やオンライン図書館・書籍の普及に伴い，マザーの著作の多くが容易かつ安価に閲覧・購入できるようになっている。本研究では，マザーの著作目録（Thomas J. Holmes, *Cotton Mather: A Bibliography of His Works, 3vols*, Blue Mountain Books & Manuscripts, 1974）に基づきながら，彼の教育思想や親子関係，躾や教育実践を考察する上で必要な著作やパンフレットを収集した。

（２）コトン・マザー研究資料の収集

アメリカ教会史，宗教史，思想史を中心に，コトン・マザー主題とした伝記的研究，博士論文等，について調査・精選して，入手，あるいは必要箇所を複写した。

（３）その他の研究資料の収集

ピューリタン研究や植民地アメリカの思想・文化・生活に関する研究書,また子ども史研究に関わる文献を収集した。

（４）マザーが作成した子ども向けの教理問答書の分析

17世紀後半から18世紀初頭にかけてJames Jameway『子どもたちへの形見』、Cotton Matherによるその New England版など、ピューリタン家族には“子どもの回心事例集”が流布していた。それらは当時の英米において聖書や『天路歴程(Pilgrims Progress)』に次ぐベストセラーであったという。そのモチーフや表現技法は、18～19世紀リバイバル（信仰復興運動）時のトラクト、19世紀の社会派小説、ヴィクトリア朝の「お涙頂戴モノ（tear-jerker）」にも影響を与え、児童文学に繋がる要素を内包していたと評されている。『子どもたちへの形見』（Jameway版とMather版）を取りあげて、その内容構成やメッセージを比較検討しながら、コトン・マザーの特徴を分析した。それによって確認された事実は、

① ピューリタン・エリートの信仰生活を描く。
② 信仰的・知的に早熟な子どもたちが登場する（小さな大人）。
③ 遊び（play, playing）等の子どもらしい活動には否定的。
④ 聖書購読，教理問答，祈り等の私的・公的聖務，安息日の厳守，説教，読書が宗教教育の中心。
⑤ 学校生活については，年齢別の学年制が未確立なことが窺われる。
⑥ 読む力に注意が向けられ，書く能力や計算能力については一切触れられていない。
⑦ 夭折した聖徒の模範的人生を例示することで信仰的挫折を未然に防止する。
⑧ 乳幼児死亡率が高い当時にあって，子どもの死に際を詳述することで、実生活のリアリティーに訴える。
⑨ 養育者・教育者を読者として想定している（宗教教育のための指導書）。
⑩ 難解な文体で論述され，記述内容がワンパターン。

以上10点であった。

17 世紀後半のニューイングランドにおいて、信仰の世代間継承問題が深刻化する一方であった。マザーの言説にはそうした現実への第 3 世代の特有の保守反動が読み取れた。彼は模範的信仰生活を完結した同胞（しかも躾や教育の対象である子ども）の生きざまを紹介する教材化するとともに、読み手である大人と聞き手である子どもの自己教育教材（教義をめぐる問答，祈りの言葉，子ども期の期待される宗教的生活倫理）となるように内容を構成していた。

しかし、こうした試みは、教育的アプローチによる内面統制の限界をも示唆するものであった。つまり、人為的な試みでは子どもを心理的に抑圧することはできても、「宗教教育は大きな御恵であり，多くの選ばれし者にとっては回心のための大いなる手段であ

る。」しかし、「子どもたちのうえに聖霊の特別な働きかけがなければ，宗教は信仰に基づく教育によって与えられた単なる印象に過ぎなくなる。」とする彼の父親インクリース Increase Mather（1639-1723）の指摘を、マザーは乗り越えることはできなかった。

その一方で、子どもに対する愛情の芽生えを窺わせるエピソードも紹介されていた（病床の子どもに涙する両親の姿，両親を慰めようとする子どもの態度）。特に死に行く子どもとそれを看取る母親との関係性には愛着を示唆するものも散見された。母子関係の姿にこそ、子どもをめぐる近代的メンタリティーの萌芽が表現されていたと見取ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）

① 佐藤哲也，近代児童文学の黎明としての“子どもの回心事例集”，世界子ども学研究会, 第 11 回例会, 2014 年 3 月 11 日, 神戸女子大学（神戸市中央区））

② 佐藤哲也，回心語録に語られた子どもの霊的世界: Cotton Mather, *A Token for Children of New England* (1700, 1771 rev.)を手がかりに, 世界子ども学研究会, 第８回例会，2013 年 3 月 30 日，青山学院大学（東京都渋谷区

〔図書〕（計３件）

① ポーラ・S・ファス著，北本正章監訳・佐藤哲也訳/訳注，世界子ども学大事典，原書房,2016 年,「罪悪感と恥辱感 Guilt and Shame」(pp.448-451)「アメリカ千住遊民の学校 American Indian School」（pp.38-41）

② 佐藤哲也，理想の父親像をめぐる歴史的断章，鈴木昌世編著,「家庭団欒」の教育学，福村出版，2016 年，pp.37-56.

③ 佐藤哲也，子ども性悪説の冥暗：初期アメリカの子ども言説，北本正章・村知稔三・佐藤哲也編著，子ども観のグローバルヒストリー（仮），原書房，2018〔発表確定〕

６．研究組織
（1）研究代表者
佐藤　哲也（SATO Tetsuya）
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２７３８１４